

## 巻頭言

### コロナ禍と三密

仏教文化研究所研究委員

西川 正 晃

人類にとって未曾有の年となりました。これまで経験したことのない新型コロナウイルスの脅威にさらされ、あたりまえであった日常が一変し、新しい日常が生活の基本となりました。その新しい日常は、コロナを収束に向かわせる一方、これまで私たち人間が大切にしてきた、人とのかわりやつながりを分断することになりました。また、孤独死や孤立など様々な問題も浮き彫りにされ、人間が生きることやその意味について、私たち一人ひとりに深く問われているように感じます。

その新しい生活様式を、誰にでもわかりやすく説明するのに、「三密（さんみつ）」という言葉がよく使われます。この用語は、二〇二〇年の新語・流行語大賞にも選ばれ、「密」という文字は、この年の世相をあらわす漢字にも選ばれています。それだけ私たちにかかわりの深かった「三密」は、「密集・密接・密閉」から名づけられた言葉です。新型コロナウイルスの集団感染が起こった場所の共通点を探した際に、この三つの「密」が共通となっていることが分かり、コロナウイルス感染症を避けるためにもこの三密を控えるようにすることが求められています。また、国の「感染拡大を予防する新しい生活様式」でも三密の回避が明記されています。

そもそも「三密」とは、空海がひらいた真言宗をはじめとする密教の

教えです。具体的には、「身密（しんみつ）・口密（くみつ）・意密（いみつ）」を合わせて三密といえます。身密とは身体・行動、口密とは言葉・発言、意密とは心・考えについての教えです。「行動・言葉・心」の三つを整えることを三密の行といい、自分自身が仏さまであることに気付き、「生きたまま仏さまになる、即身成仏」を達成するという考えなのです。ところが私たちは行をするどころか、生きていくために多くの罪業を積み重ねています。そして罪業が苦しみをもち、苦が罪業を生んでいくという負の連鎖から、一步も出られません。私たちが受ける結果のすべては私たちの行いによって生み出されているのです。親鸞聖人は「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」（歎異抄）と吐露されました。真実の行は、本願のほたらきである南無阿弥陀仏をいうのであって、南無阿弥陀仏より他に救いのないことを、聖人は生涯をかけて明らかにしてくださったのです。

お念仏に救われていくこの身とさせて頂いた今、行動と言葉と心とを整えようとする行いは、南無阿弥陀仏へのご恩報謝の営みと味わわせて頂きます。苦が罪業を生むという積み重ねとくり返しを断ち切り、事を科学的に分析し、真実を明らかにしていくプロセスこそ、コロナ禍における我が身の方途ではないかと感じております。その営みの成果物の一つである『岐阜聖徳学園大学紀要』第二十一号をお届けいたします。ご執筆頂いた先生方にお礼を申しあげますとともに、法義相続の念をもってご高覧賜りますようお願い申し上げます。

令和三年（二〇二一）年三月三十一日

